Tokyo Metropolitan Archaeological Center

たまのよこやま

1/964　～多摩ニュータウンの調査を振り返る～
多摩ニュータウン No.72・795・796 遺跡特集② 1

遺跡だより　千代田区　永田町一丁目遺跡 3

学芸員のお仕事（2）　社会科見学 4

東京文化財ウィーク 2022 特別展示特集　多摩ニュータウン No.9 遺跡の土偶 5

令和４年度企画展示「境・道・恵―多摩丘陵の３つの顔―」解説（2）「道」.....7

この表紙の写真は実物大です。

令和４年度企画展示　好評開催中

「境・道・恵―多摩丘陵の３つの顔―」

東京都埋蔵文化財センター報　130

1/964

多摩ニュータウン地域では、964ヶ所もの遺跡が確認されています。その中から調査担当者の記憶に深く残る遺跡について、リレー方式で振り返っていきます。

#53 多摩ニュータウン No.72・795・796 遺跡特集②

考古学は、遺構（生活の残存）と遺物（道具の残存）の断片をつなぎ合わせて歴史（特に地域史）を復元し記述する学問です。発掘で得られた遺構と遺物の情報をつなぎ合わせる際に留意しなければならないことがあります。今回は、No. 72 遺跡の調査から学んだ重要な視点を二つ紹介します。

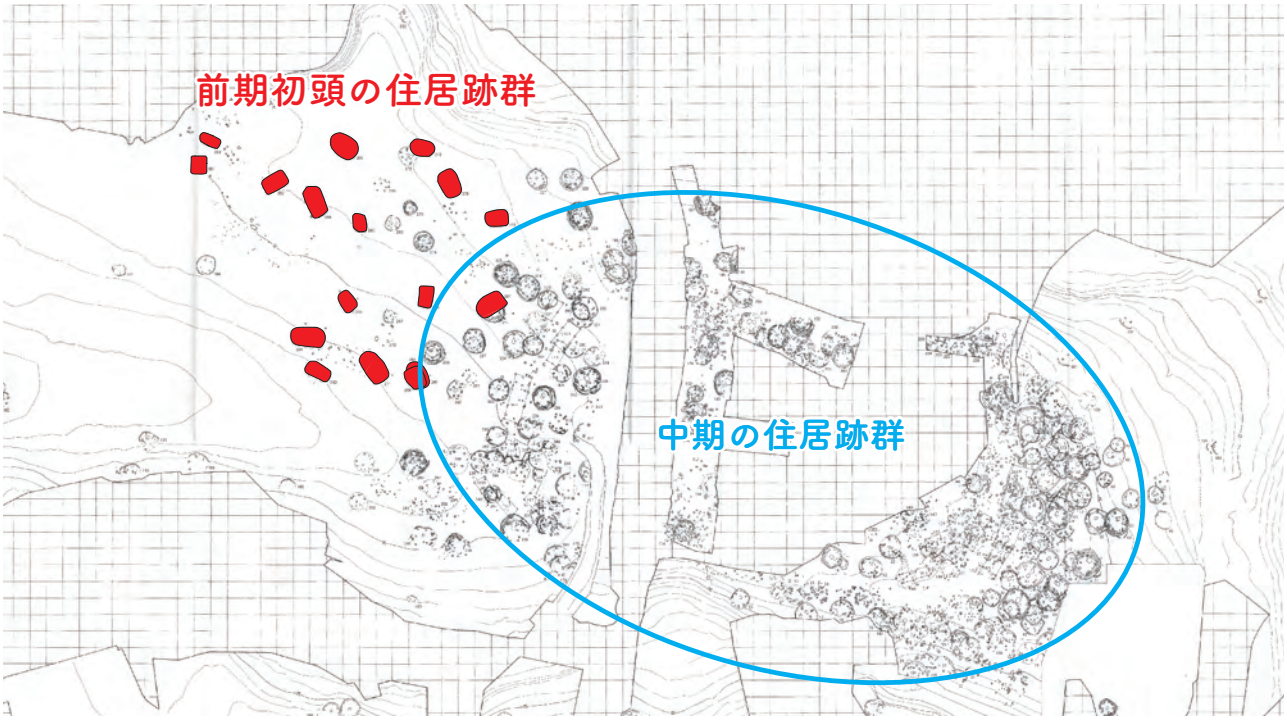
教訓その１「あればある！」

No. 72 遺跡は、前号で触れたように多摩地域の縄文時代中期における最大規模を誇る集落として著名となりましたが、7・8 次調査における前期初頭の集落の発見も看過できない重要な成果です。住居跡は 17 軒確認され、前期初頭の集落も多摩地域では最大規模の集落なのです。

17 軒の分布を見ると、「環状集落」の様相を呈し、中期に代表されるムラの作り方が 1,500 年以上も遡る前期初頭から既に存在していたことがわかります。住居跡の分布をさらに見ると、真ん中を横断するように帯状の空白地帯があり、それを境に大きく北と南の 2 つのグループにまとまるようです。この 2 つのグループが何を物語るのか、2 つの集団を表すのか、住居構築の時期差を示すのか、今も検討すべき課題です。これも重要な視点なのですが、それ以上に注視すべきは、前期初頭集落の住居跡群の存在そのものなのです。

前期初頭の住居跡群は、幸運にも中期集落の居住エリア（住居跡群）から少し外れて見つかりました。当時の住居は、中期のものと比べると掘り込みが非常に浅く、よくよく注意しないと削ってしまう危険があります。前期と中期では、家の作り方が違うことを念頭に置かなければなりません。

実は、7・8 次調査以前から中期の住居跡群でも前期初頭の土器が見つかっていました。今回は幸運にも中期の住居跡群から外れていましたが、もし、全く同じ場所に作られていたなら、どうだったので



前期初頭と中期の住居跡分布

中期の住居跡（掘り込みが深い）と前期初頭の住居跡（掘り込みが浅い）

しょうか。おそらく、前期初頭の集落跡は中期の縄文人によってムラづくりのためにことごとく掘り返され、壊され、その結果、遺物（土器・石器）のみが地中に残されてしまったはずです。つまり、遺物が「あれば」その時期の遺構が見つからなくても、そこで縄文人が活動していたこと（ムラが「ある」こと）を如実に物語っているのです。このことを失念すれば、正しい地域史を記述することができません。No.72 遺跡の調査では、前期後半の土器もたくさん見つかっています。ということは…

教訓その２「なくてもある！」

言うまでもなく、発掘調査では遺跡から多くの情報を得ようと必死です。それでも、なかなか得られない情報があります。それは、微細な遺物（道具）です。調査では掘った土と一緒に大きな土器や石器を捨ててしまうことはありません。しかしながら、微細（びさい）な遺物は見逃してしまうことがあります。では、土と一緒にどのような微細遺物を見逃していたのか、それが遺跡の評価にどの程度影響するのか…、

325 号住居跡のミニチュア土偶

7・8 次調査ではある方法で検証を試みました。それは、住居に埋まっていた土（覆土（ふくど））を捨てずに残しておき、乾燥させた覆土を篩（ふるい）に通しながら水洗いし、微細な遺物を回収する「水洗選別法」です。

当初は複数の住居跡を対象とする予定でしたが、調査期間の関係で、１軒全部の覆土を洗ったのは、中期中葉の 325 号住居跡のみでした（採取した覆土の量は 14㎥で、洗い終わるのにたった１軒でも６ヶ月を費やしました）。200 軒を超える集落全体からすれば、ごくわずかな量の試みですが、とんでもない成果を得ることができました。

微細な土器片（どきへん）と石器剥片（せっきはくへん）の他に、なんとミニチュア土偶（どぐう）の頭部を回収したのです！その大きさは 1cm で一円玉より小さいものの、一般サイズと同様に精巧な作りです。普通なら、見つけることが困難な微細遺物にとても重要な情報が含まれていました。

土偶は、一般的にムラの人々が祈り、マツる対象とされています。ところが、この土偶はとても小さく、集団で崇（あが）めることは到底できません。そこで、個人が所有し、崇めていた可能性が浮かび上がります。もしかしたら、「お守り」として身につけていたものかもしれません。ごく小さな遺物ですが、とても大きな成果となり、今まで考えられていた土偶の扱い方を見直す機会となりました。

「あればある！」、「なくてもある！」まるで禅問答のようですが、この教訓を念頭に入れておかないと、遺構と遺物の断片をつなぎ合わせて記述する際に大きな過ちを犯してしまう可能性があります。

「ない意味を考えなさい！」大学の恩師の言葉を思い起こしたNo.72 遺跡の調査でした。（山本　孝司）

遺跡だより 133

千代田区　永田町一丁目遺跡

永田町一丁目遺跡（千代田区№37）は、千代田区永田町に所在する遺跡です。この遺跡は江戸城外堀の一部である溜池の北側斜面に位置しており、江戸時代には「虎御門内新道（とらのごもんないしんみち）」と呼ばれる旗本屋敷が多く集まる一角でした。

調査地は南東側の溜池に向かって傾斜しており、さらに調査区の中央には高低差約２ｍの段差があります。段差の北側は旗本成瀬家、後に旗本鳥居家が、南側には旗本川窪家、後に旗本保科家が屋敷を構えていました。

調査を進めると、調査区中央で東西に走る18世紀中頃と考えられる幅約３ｍの溝（1166号）が確認されました（図１・図２）。1166号を境に堆積する盛土の様相が大きく異なっていることから、この溝は成瀬家・鳥居家と保科家の屋敷地を区切る地境の溝であると考えられます（図３）。また、1166号の北側には大型の廃棄土坑が並んでおり、成瀬家と鳥居家が屋敷境付近をゴミ捨て場として利用していたことがわかりました。さらにその下から1166号と重なるように東西に走る古い溝（1400号）が検出されており、1166号と同様に屋敷地を区切る溝であると考えられます。

1400号の底面は東京層と呼ばれる砂で形成された自然堆積層にあたります。東京層の上面で検出された遺構からは16世紀末～17世紀初頭の遺物が出土していますが、この面では1166号や1400号のような明確な地境は確認できませんでした。このことから、屋敷境は17世紀前半以降に形成されたことがわかりました。そして、この屋敷境の溝が埋没した後に、同じ位置に石垣（図４）が積まれ、近年まで続く地境となりました。約400年前に生まれた屋敷境が現代に至るまで踏襲されてきたことに、江戸と東京の歴史的な連続性を感じることが出来ます。

（佐藤　亮太）

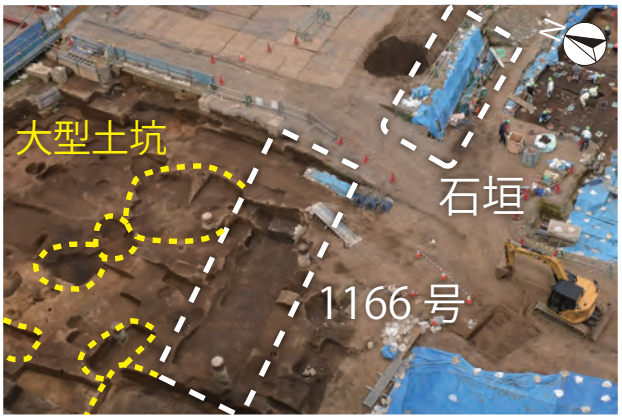


図１　1166号と石垣の位置関係

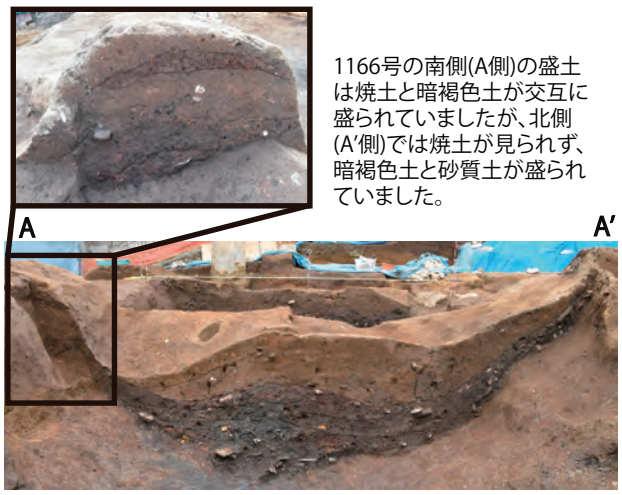


図３　1166号の堆積状況

図２　1166号の調査状況

図４　調査区内に残る石垣

なかのひと

学芸員のお仕事（2）社会科見学

当センターの調査研究員の多くは都内の発掘調査に出向いていますが、その一部はセンター本部の「中の人」として、広報学芸業務に従事しています。その仕事ぶりや、いかに。

当館では団体見学のご予約も受け付けています。特に、歴史の授業の導入として社会科見学を行う周辺地域の小学校には例年ご利用いただいており、歴史の授業の始まる６月は団体見学の繁忙期です。今回はその様子をご紹介します。

申込受付、先生方による施設の下見

お申込みを受け付け、見学の日取りが決まったら、先生方に施設の下見をお願いしています。当館の展示内容をご確認いただき、班分けや時程などを打ち合わせて、当日に備えます。

展示室のご案内

当館の常設展示では、旧石器時代から近現代まで、時代の流れに沿って多摩ニュータウン遺跡群の出土品を見ることができます。実物を間近に見てみると、「どうして縄文土器はひび割れだらけなのだろう？」などと、これまでになかった疑問が湧いてきます。学芸員は「土器は普通、割れた状態で出土するので、破片をつなぎ合わせているんですよ。」というように小学生の質問に答えたり、時には視点を投げかけたりして、学習の手助けをします。

体験コーナーのご案内

体験コーナーでは、昔の人の道具や考古学研究者の仕事を体験することができます。例えば縄文土器の立体パズルは、遺跡から出土した土器の破片を接合する作業を模倣したものです。学芸員は自身の経験に基づいて、小さな破片の割れ口や模様に注目する方法を子どもたちに伝えます。

遺跡庭園「縄文の村」のご案内

屋外の遺跡庭園「縄文の村」は、都指定史跡である多摩ニュータウンNo.57遺跡を保存・公開するために整備された場所です。３棟の復元住居や、縄文時代の植生を再現した森、当時の景観を残した地形などから、縄文時代の暮らしを体感することができます。学芸員は季節ごとに変化する植物から昔の人の植物利用について解説するなど、臨機応変に様々なサポートをします。

以上が社会科見学のあらましですが、子どもたちの関心に応じて対応の仕方は様々に変わります。より広く、深く学習の手助けができるように、学芸員も勉強する日々です。

今年の７～８月は特に、気温35度に達する猛暑日や館内の空調設備の故障に見舞われ、予定どおりの実施ができなかった団体もありました。しかしそんな中にも、来年度こそはというお声をいただいており、その期待を背負う学芸員の責任を感じています。解説中の学芸員を見かけたら、応援してくださると嬉しいです。　（宮本　由子）

展示室で土器や土偶を見学中

遺跡庭園で頭上を見上げて木の実の解説

東京文化財ウィーク2022 特別展示特集

多摩ニュータウンNo.9遺跡出土の土偶

図１　TN No.9 遺跡から出土した土偶（正面 - 側面 - 背面）と「背面人体文」

TN No.9遺跡とは

TN No. 9 遺跡（稲城市若葉台）は、多摩丘陵の中でも有数の規模を誇る縄文時代中期の集落遺跡です。調査は昭和 59 年度～平成 14 年度までに断続的に 5 次にわたり行われ、縄文時代中期後半には約 500 年間にわたり、拠点的な大規模集集落が営まれていたことがわかっています。

この時期の遺構は竪穴住居跡 137 軒・土壙墓（どこうぼ）34 基・埋甕（うめがめ）47 基のほか、土坑・集石・ピットや、土器捨て場と言われる大規模な遺物集中部も検出され、膨大な数の遺物が出土しています（図５）。

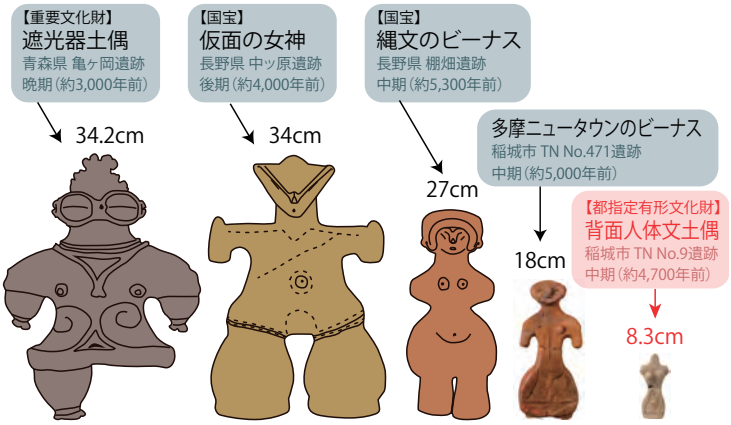


図２　土偶の大きさ

東京都立埋蔵文化財調査センターでは例年、東京文化財ウィーク特別公開期間に合わせて常設展示で未公開の指定文化財などを展示しています。今年度は 10 月 29 日～ 11 月 24 日まで、多摩ニュータウン（以下、TN）No. 9 遺跡の土偶（どぐう）の一部を公開します（図１）。

最近何かと話題になっている土偶。縄文時代を通して全国的に出土し、現在では 18,000 点ぐらい見つかっており、特に縄文時代中期以降の東日本に多く見られます。〝土偶〟といってまず思い浮かぶのは国宝土偶や、重要文化財に指定されている亀ヶ岡遺跡の遮光器（しゃこうき）土偶ではないでしょうか。当センターでは TN No. 471 遺跡から出土した「多摩ニュータウンのビーナス」も展示しています。これらは大きさも形もさまざまで、つくられた時期も異なります（図２）。

土偶の用途については、かつては妊娠した女性をかたどったものが多いこと、壊れて出土することが多いことから、出産にまつわる儀礼に使われたものという解釈が一般的でしたが、出土例が増え検証が進んだ現在では、目的や用途は多様であり断定的に語ることはできない、という考え方が主流です。最近では男性をかたどったとみられる土偶も出土しています。

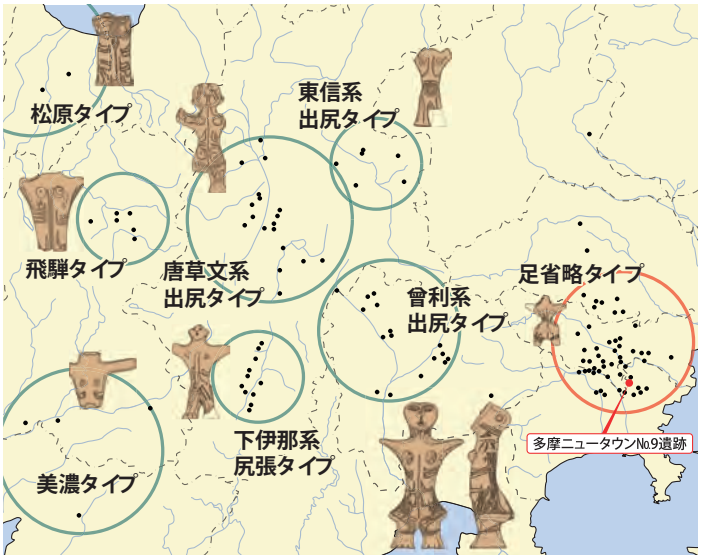


図３　縄文時代中期後半の土偶の分布（安孫子 1998 一部改変）

図４　TN No. 9 遺跡出土土偶の足の表現の違い

多摩ニュータウン遺跡群からは総計で約 300 点の土偶が出土しています。これらは TN No. 471 遺跡から出土した「多摩ニュータウンのビーナス」を代表とする縄文時代中期中葉の「出尻土偶」と呼ばれるタイプのものと、今回取り上げる縄文時代中期後半のある時期にだけ盛行する小形の「背面人体文土偶」（図１）に大別されます。この背面人体文土偶の名称は、背面に施された文様が、あたかも腕を伸ばした別人が土偶の背後から抱きついているように見えることから、考古学者の安孫子昭二氏によって提唱されたものです。（安孫子 1998）

縄文時代中期後半頃は全国的に見ると土偶が少ない時期なのですが、関東地方南西部から中部地方にかけてはいくつかの地域ごとにまとまりを持って分布しています（図３）。背面人体文土偶が盛行するのは加曾利 E II 期から E III 期に移行する段階ですが、この地域は連弧文土器と呼称される独自の土器や中部高地系の曽利系土器が多く認められることから、これらとの関連を指摘する意見もあります。

背面人体文土偶として分類されているものにもいくつかのタイプがあり、多摩丘陵を含む関東地方南西部の事例は、小形で足が省略されるのが特徴です。中でも TN No. 9 遺跡の土偶は、顔の表現が省略されたものが大半を占めること、胸や腹などに刺突文が施されたものが多いことなど、同じ多摩ニュータウン地域の中で比較しても際立った特徴があります。さらに TN No. 9 遺跡出土例の中にも、足の表現などにいくつかのパターンが見受けられ、製作時期の差であるととらえられます（図４）。

TN No. 9 遺跡の土偶は、小さな破片も含めて 101 点と、一遺跡としては当時都内最多の出土数を誇りました。その重要性が認められ、出土した土偶は一括して都指定有形文化財（考古資料／ 2000.03.06 指定、追加指定 2005.02.22）となっています。

（武笠　多恵子）

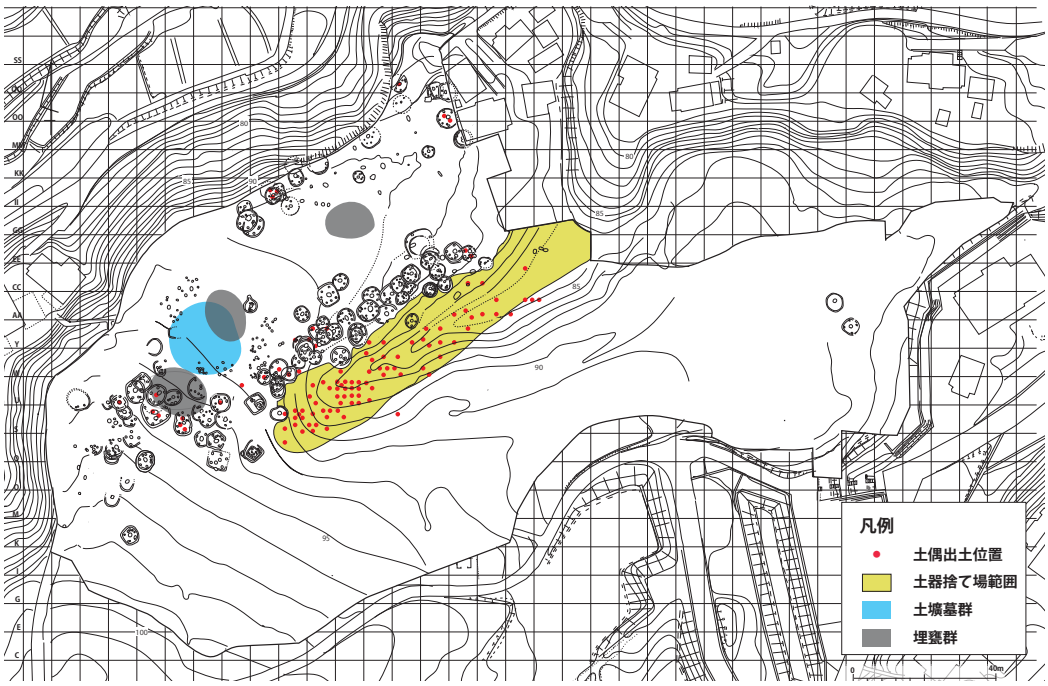


図５　TN No. 9 遺跡　縄文時代遺構配置と土偶出土分布図

参考文献
安孫子 1998「背面人体文土偶」『土偶研究の地平 2』pp.295-320 勉誠社

令和４年度　企画展示

境・道・恵　―多摩丘陵の３つの顔―　解説（２）　「道」

前回の企画展示解説では、多摩丘陵が人の移動を妨げる「境（さかい）」となっている事例を紹介しました。立地や地形の特性上、自（おの）ずから地域を区切る境界になりやすい多摩丘陵ですが、ときには遠く離れた場所の人々をつなぎ、あるいは人々が互いに行き交う場となることもありました。今回は、そんな多摩丘陵の「道（みち）」としての顔を、弥生時代の中部高地との交流を例にして見ていきたいと思います。

縄文時代中期の繁栄が嘘のように、その後の多摩丘陵からは人の気配が消えます。縄文時代晩期以降、2,000 年にも及ぶ遺跡数急減の時期を経て、弥生時代中期後葉に丘陵に現れた人々が使っていたのは宮ノ台式と呼ばれる土器です。宮ノ台式は東海方面の影響を受けた土器型式で、農耕という新しい生活様式とともに新たに多摩丘陵を訪れた人々の出自を物語ります。一方で多摩丘陵の遺跡で見られる特徴として興味深いのは、長野や山梨等、中部高地の影響を受けた土器がちらほら見つかることです。宮ノ台式土器の時代と同時期、中部高地系の土器は北関東や秩父・青梅にも見られますが、多摩丘陵はその分布の南端にあたります（下図）。関東山地東縁を南下してきたのか、あるいは山梨方面から山を越えてきたのか、具体的なルートはわかりませんが、当時の多摩丘陵に中部高地から通じる「道」が通っていたことは確かなようです。

石川・柿沼・宅間 2017「ときがわ町破岩遺跡」『埼玉考古』52、石川 2011「9 関東地域」『講座日本の考古学 弥生時代（上）』を基に作図

宮ノ台式土器の分布範囲

黒曜石製の勾玉

実は多摩丘陵と中部高地との関連は縄文時代に遡（さかのぼ）ります。それを物語るのが、前号から巻頭特集している多摩丘陵最大の縄文中期集落、多摩ニュータウン No.72 遺跡から出土した長野県産の黒曜石（こくようせき）です。多くの黒曜石の原石が出土した No.72 遺跡は、当時石器の材料として欠かせなかったこの資源の関東方面への供給拠点だったとも考えられ、多摩丘陵が中部高地と関東を結ぶ「道」の中で重要な位置を占めていたことが窺（うかが）えます。

最後に常設展示からも関連する遺物を紹介しましょう。多摩ニュータウン No.939 遺跡から出土した勾玉（まがたま）（上図）は、通常鋭い割れ口を利用して刃物に利用することの多い黒曜石を磨（みが）いて装飾品にした珍しい逸品です。分析の結果、長野県産の黒曜石で作られていることが判明しており、縄文時代と同様、弥生時代においても黒曜石が運ばれていた「道」があったことがわかります。

では弥生時代、中部高地からの「道」を歩んできた人々は、縄文時代にもその「道」を使う人々がいたことを知っていたのでしょうか？前述の通り、縄文時代後晩期から弥生時代中期後葉まで、多摩丘陵はほとんど無人の地だったのではないかと思えるほど遺跡数が急減しますから、縄文中期の人々と弥生時代の人々の間に集団としてのつながりは無かったと思われます。弥生時代の人たちは新たに「道」を切り拓（ひら）いたのか、それとも縄文時代からの「道」の知識はどこかで伝わっていたのか、展示を見ながら想像を膨らませてみてはいかがでしょうか？

（舟木　太郎）

※今号の表紙：中心の１点は多摩ニュータウン No.72 遺跡、それ以外は多摩ニュータウン№９遺跡の土偶。

たまのよこやま 130　　2022 年 9 月 30 日発行
東京都埋蔵文化財センター　〒206-0033 多摩市落合 1-14-2　TEL 042-373-5296　https://www.tef.or.jp/maibun/

背景画像：国土地理院ウェブサイトで提供の航空写真および基盤地図情報を用いて作図・加筆